

特集「並列処理」の編集にあたって

中 島 浩[†] 富 田 眞 治[†]

昨年度に引き続き「並列処理」特集、またはいわゆる「JSPP 特集」を学会員諸氏にお届けする。「1993 年並列処理シンポジウム JSPP '93」(実行委員長: 村岡洋一 早稲田大学教授)は、本学会の6研究会(計算機アーキテクチャ, データベース, オペレーティングシステム, アルゴリズム, プログラミング, ハイパフォーマンスコンピューティング)と電子情報通信学会のコンピュータシステム研究会の共催により, 昨年(1993年)5月に東京にて開催された。寄せられた発表申込数は過去最高であり, また会議は300名もの参加者を集める大盛況であった。本特集は, JSPP '93で講演された51件の一般論文の著者に投稿を呼びかけ, その結果採録された17件の論文を掲載したものである。

JSPP も昨年で5回目となり, 並列処理というホットな話題を議論する場として確立された感がある。しかし並列処理技術の進歩が日進月歩であるのと同様, JSPP も回を重ねるごとに脱皮を繰り返しており, JSPP '93も前回に比べて様々な面での変化と進歩があった。

まず特筆すべきは, 海外から多数の発表申込があり, その中から7件の論文発表が行われたことである。JSPP が基本的に domestic な会議であることを承知の上で多くの申込と発表があったことは, 日本に対する高い注目度を示すものだろう。ただ「公用語=日本語」については海外からの参加者に不満が残るのは当然である反面, 単に「公用語=英語」とするのは, 権威ある国内シンポジウムとしてのユニークさが失われると言う声も少なからずある。このユニークさと国際性のバランスをとりながら, JSPP がどのように変身していくかを見守って行きたい。

また発表論文の「ソフト化」が進んだことも大きな変化の一つである。この傾向は一昨年からあったが, 特に JSPP '93ではプログラミング言語やコンパイラに関する論文が急増した。このことは, 昨年の特集と本特集を比べてみても明らかであるし, また JSPP '94でもさらに拡大されているようである。その反面, 基

礎理論や応用の分野の論文が若干減少したことが懸念されたが, 今回だけの一休みであると信じたい。

さて本特集に関してであるが, これも昨年から大きな変化があった。その一つは, いわゆる「既発表論文」の問題がクリアされたことである。すなわち昨年8月に投稿原稿の取り扱い規約が改正され, JSPP のように本学会が主催する会議での発表論文は既発表とはみなされなくなった。このような扱いについては様々な議論があるが, 学会主催の会議の活性化を図るために本特集のような企画を行う立場からは大いに歓迎すべきであり, 論文誌編集委員会の英断に感謝したい。

なおここで確認しておきたいことは, 上記の改正が本特集の質の低下を招く心配は一切なかったということである。本特集に投稿された論文は, 一般論文と同一の基準により審査されており, 論文誌に掲載されるに十分な内容と判断されたもののみが掲載されている。また, シンポジウムでの発表後に得られた知見を加え, 査読者の厳しい指摘に基づく改善を行ったものも多く, 過去の特集と比べて優るとも劣らない論文ばかりであると密かに自負している。

もう一つの大きな変化は, 論文誌発行の電子化の先駆けとして, L^AT_EX による最終原稿作成を試みたことである。この試行にあたっては, jT_EX の作者でもある NTT 基礎研究所の齊藤康己氏に多大なご援助を頂き, 印刷関係者の方々のご協力も不可欠であった。また何よりも, 試行対象となった6編の論文の著者の方々から頂いたボランティアとしての快いご協力が, 今回の試行が成功した最大の要因である。日本における情報処理研究の精華を集めた本誌にして, ようやく電子化に踏み切ろうかというのはいささか遅きに失した感もあるが, 上記の方々の労苦に報いるためにも, 本格的な実施が一日でも早いことを願っている。

5月18日からの JSPP '94 の開催を間近に控える中, 本特集をタイミング良く発行するために, 査読者の方々には種々のご無理をお願いした。また本特集の編集委員の方々にも様々な形でご協力いただいた。ここに深く謝意を表するとともに, 本特集が並列処理研究のますますの発展に寄与することを願って, 本稿の結びとする。

[†] 京都大学工学部情報工学教室